

平成 26 年度東京都高等学校対校陸上競技選手権大会のみどころ

男子

昨年は大分インターハイや東京国体で、東京都の男子選手が優勝はもちろん多くの入賞を果たしました。

また、1年間を通じ東京都高校新記録も3種目樹立するなど健闘しました。

今年度の山梨インターハイ・長崎国体を目指し今大会が南関東大会への関門となります。今年の東京都大会で活躍が期待される選手たちをご紹介します。どうぞ、ご声援のほどお願いいたします。

・短距離

昨年、1年生ながら大分インターハイで100m4位、200m6位、更には東京国体少年B200mで21秒25の大会新記録で優勝した大嶋 健太（東京2）が今年の全国優勝候補NO.1である。東京選手権では寒いで10秒58をマークしており当然、今大会での活躍が注目される。しかし、5月20日からのユース・オリンピックアジア予選の日本代表となり今大会の出場を免除され、南関東大会からの出場となる。100mは出場が可能だが第2週目の200mは出場しないと思われる。また、もう一人注目される選手がいる。昨年度の全国中学やジュニア・オリンピックで活躍したS・A ハキーム（城西大城西1）だ。高校入学直後の支部春季競技会では10秒65をマークしており、さらにスピードに磨きがかかっている。今大会は200mだけの出場だが、追い風参考記録ながら21秒42と驚異的な記録をマークしている。すでに高校でも全国級だ。また、小池 真郁（久我山2）も上位入賞候補だが、東京選手権でのハムストリングスの肉離れから今大会欠場となったのは残念である。他に上位を狙うのは福島 翔夢（都町田3）、永山 雄登（東海大高輪台3）、田村 一浩・笠木 拓海の創価コンビ、西尾 悠汰・山崎 大紀の城西大城西コンビ、静谷 悠希・鈴木 康平の成城コンビにも力があるだけにレベルの高い争いとなりそうだ。

400mでは、昨年の実績で考えると坪 佑貴（八王子3）と椿 純平（城西大城西2）が47秒台で優勝を争うことが考えられるが、今季はまだ本領を発揮できていない。二人が万全でなければ、支部予選トップの北山 亮介（東京2）、尾崎 正大（桐朋2）の2年生と新人大会で優勝した手塚 光貴はじめ溝口 侑平・吉田 熙那の日大豊山トリオも実力十分であることから、48秒台でないと入賞は厳しいと思う。

・中長距離

800mではここ数年、ハイレベルな戦いから好記録が続出した。今年もタイムレースの予選からレベルの高い争いを期待したい。その中で、昨年1分54秒台をマークしているのが、長尾 俊希（城西大城西3）、手塚 光貴（日大豊山3）の2名であり今大会でもレースの中心となるだろう。この種目を得意とする城西大城西はここ数年全国大会での実績が高いだけに、その指導を受ける長尾に勝機があるかもしれない。二人のほかには、長距離が専門ながらスパートのキレが鋭い斎藤 雅英（早実2）や支部予選トップの山田 陽平（都文京3）にもチャンスがあると思われる。タイムレースの予選から目が離せないが、1分52秒台での優勝を期待したい。

1500mで優勝を争うのは、今季3分台連発の岡田 健（久我山3）と斎藤 雅英の二人ではないだろうか？岡田は昨年の世界ユース選手権で入賞を果たしている。対する斎藤は東京国体少年B3000mで優勝し冬の各駅伝でも快走を見せた。この二人がスタートから競り合うことで好記録の誕生も期待できるが、支部予選で4分を切っている選手が他にも4人もいるだけに、もはや3分台でなければ6位入賞は厳しいかもしれない。

5000mに斎藤は出場しないが、岡田に対抗できる横田 佳介（拓大一3）はじめ片西 景（昭和一学園3）、斎藤 寛明（久我山2）、竹山 直宏（久我山3）、越川 堅太（東京実業2）あたりが両種目でレース

を引っ張ると混戦となりそうだ。いずれにせよ今年の長距離はハイレベルな展開となることだろう。

3000mSCは、遠藤 宏夢（久我山2）が実力的に優位で、昨年も1年生ながらインターハイにまで駒を進めている。走力・ハードリングも抜きん出ており、優勝最有力で間違いない。小野塚 久弥（青山学院3）、本橋 佳樹（立教池袋2）らが粘り強く走れば勝機が訪れるかもしれない。9分20秒を切るレースを期待する。

・ハードル

110mHは、栗城 アンソニータイレル（八王子3）が東京選手権で大学生・社会人相手に予選14秒48、決勝14秒52とインターハイ決勝進出レベルの好記録を連発した。膝の故障も回復しハードリング・走力もひと冬越えたくましくなった。今大会の優勝は間違いないだろう。上位を争うのは荒井 駿哉（立教池袋3）、池村 練治（都武蔵村山3）、平松 ハプテンバ（都芦花2）と思われるが、支部予選で14秒台をマークした平松とスプリントに長けている荒井あたりが10台目を越え追い上げそうだ。

400mHでは、関東新人大会に優勝し54秒台の記録を持つ深津 大輝（都駒場3）が実力NO.1といえるが今季はまだその記録を上回っていない。逆に新人大会2位の北山 亮介（東京2）が支部予選で54秒50と自己記録を更新し上り調子だ。また、110mHの栗城も54秒08とトップタイムで今大会に挑む。共に52秒前半を目指して積極的なレースを期待したい。

・競歩

5000m競歩では、この種目専門の指導者がいる東京実業の選手がここ数年全国大会で活躍している。今季すでに20分台をマークし、10kmでは久しぶりに東京都高校記録を更新した小野川 稔（東京実業2）の優勝は間違いないと言ってよいだろう。ただ、ユース・オリンピックアジア予選日本代表となり出場は微妙なところだ。同じ東京実業で21分台の記録を持つ猿山 浩史（3）や21分台を目指す村上 武（3）、塩入 滉介（明大中野3）もインターハイ出場に向け自己記録を伸ばしたいところだろう。

・跳躍

走高跳では、平塚 玄空（岩倉2）が東京選手権で2m03をマークし、昨年から成長したことを証明している。助走はまだ安定していないが、更なる記録更新が大いに期待できる。自己記録から見ると石川 遼（桐朋2）、中島 由来（東京成徳3）、八田 隆純（東京3）、鈴木 海平（堀越3）らが平塚に対抗するだろうが、支部予選で健闘した伊関 礼（國學院2）や染谷 知威（日大桜ヶ丘3）も2mを跳ぶ力があり侮れない存在だ。

棒高跳は、4m50の自己記録を持つ田代 丈（東京3）の優勝は固い。しばらく自己記録を更新できていないが、ここ数試合は4m70にまでバーを掛けているので期待したい。熊坂 優（東京1）も支部予選で4m30を跳んでいることから上位を争うだろう。入賞ラインが4m以上となることを期待したい。

走幅跳は、東京国体少年男子Bで2位に入賞した中村 健士（都調布北2）が7m30以上を跳べる実力があり優位である。踏み切りや空中動作は卓越した技術を備えているが助走スピードに弱点があった。しかし、走力アップを図るべく積極的にトレーニングに取り組み成果を上げた様子だ。支部予選では追い風参考ながら7m32をマークし、それを証明した。中村を追うのは井関 慶人（東京3）と金子 諒（都練馬工3）が中村と競い合うとレベルが上がることだろう。また、1年次に活躍した間中 太亮（日大豊山3）の復活にも期待したい。

三段跳では井関、金子が優勝を争うだろうが14m91の自己記録を持つ井関が一步リードしていると言えよう。久しぶりに15m台の優勝記録となる可能性も高い。14mが入賞ラインとなることを望む。

・投擲

砲丸投・円盤投とも東京高校の安藤 夢（3）が優勝しそうだが、100mの大嶋、競歩の小野川と同じくユース・オリンピックアジア予選に出場するため円盤は欠場の予定だ。砲丸では昨年の東京国体で16

m 4 4 の好記録をマークし 4 位としていて今シーズンは全国優勝候補の一人でもある。大会記録の更新を期待したい。円盤では支部予選で東京都新記録を樹立したが、更なる記録更新は南関東となろう。砲丸で安藤に続くのは同じ東京高校の栗本 恭宏（2）で 1 4 m は越えたいところ。1 3 m が入賞ラインか？

安藤のいない円盤では昨年 4 4 m 0 7 をマークしている船越 龍馬（都足立東 3）が優位となるだろう。しかし、山口 史哉（都小平 3）、池田 航太・石塚 恒祐（東京成徳 3）、高崎 暁大（東京 3）、福留 大成（東京 2）がすでに今季 4 0 m を越えていることからレベルの高い決勝となりそうだ。4 0 m が入賞ラインだろう。

ハンマー投げでは、強化練習の成果が出ており、今季すでに 5 5 m を越えた大谷 健也と 5 4 m 台の記録を持つ坂下 幸太郎の都府中工コンビが優勝を争いそうだ。二人とも昨年からハンマーの加速がスムーズになり、安定したターンを習得しているので大きな失敗も少ないと感じる。岩崎 瑞生（保善 2）も 5 1 m を越えているだけに二人に迫りたいところだ。4 7 m あたりが入賞ラインとなるだろう。

やり投げは、昨年 6 2 を投げていた山田 舜（東京成徳 3）が一枚上手であると思われる。ラストクロスから自分のリズムでなげることが出来れば今年も大きなアーチが期待できる。田島 史章（岩倉 3）のパワーにも期待したいが肘の状態が気かりである。本調子なら 6 0 m を越えることは間違いないので山田と競り合いそうだ。5 5 m に迫ることが出来た選手に南関東出場が決まりそうだが、まずは予選の 5 0 m 突破がカギとなるだろう。

・混成競技

八種競技では、昨年この大会で 5 0 0 0 点を越えている森 遼河（東京 3）が優勝候補と言える。走高跳・やり投・ハードルと後半戦に得意種目が多いだけに 2 日目に追い上げていく展開が予想できる。1 日目を終えて上位と差がなく終えれば勝つチャンスは広がるだろう。森と争いそうなのが大沢 聖也（堀越 2）・本橋 輝久（都豊多摩）あたりだろう。特に大沢は 4 0 0 m H でも入賞が出来る高いスプリント能力を備えているのでチャンスが大きいだろう。試合経験の少ない東京都選手たちがどれだけ成長したかは今大会でしか見られない。

・リレー

4 × 1 0 0 m リレーでは城西大城西・東京・成城の 3 校が競り合うことだろう。その中で、1 年生でエースのハキームが加わった城西大城西が支部予選で「全国級の 4 0 秒台」をマークした。支部レベルでの 4 0 秒台は東京都初である。今年は全国優勝も期待できる。エース大嶋 健太を擁する東京は、支部予選ではその大嶋抜きで 4 2 秒 5 8 をマークしたが、大嶋投入でどれだけの記録を出すかが楽しみだ。成城も静谷・鈴木とまとまったチーム力からインターハイを狙えるところまで来ている。また、都立勢では南平の健闘に期待したい。

4 × 4 0 0 m リレーでも城西大城西が一步抜きんでている。それを選手層の厚い日大豊山が接戦に纏れさせるだろう。立教池袋・八王子・都文京も支部予選の記録を更新する可能性は高いと思われ、3 分 2 0 秒を切らなければ 6 位入賞は厳しいと予想する。「総力戦」となる最終種目のバトルを期待したい。

・総合

総合優勝は東京高校に間違いないだろう。各種目に満遍なく得点を重ね連覇を遂げそうだ。しかし、大嶋や安藤が欠場することを考えれば得点が減るので他の選手の奮起がなければ危うくなる可能性もある。リレーをはじめスプリント種目で加点できる城西大城西、長距離種目で多数入賞しそうな久我山が上位に食い込みそうだ。

女子

女子は東京国体でも皇后杯を獲得し、まさしく「全国一」の競技力であるといえる。今年の大会でも昨年以上にレベルの高い選手が揃い、競り合うことで好記録誕生の可能性も高くなるだろう。女子にも期待したい。

・短距離

100mは、支部予選の記録では風などの条件的に比較はしがたいが、やはり実力的には11秒台の記録を持つ二人。東京国体B200m3位のエドバー イヨバ（東京2）と、昨年の関東チャンピオンである荒井 アンバー（日工大駒場3）が万全であれば優勝候補だろう。二人とも後半追い上げタイプだが、この冬にスタートが上達したエドバーが優位かと思われる。また、同じ第一支部の廣田 丹子（都つばさ総合3）も昨年の関東新人での入賞から自信を持ち「いい走り」が継続されていて、東京高校2年の上村 希実とともに11秒台を狙い上位入賞は確実であろう。第一支部以外の選手では広沢 真愛（八王子2）が今季好調で期待できる。

200mも100m同様かと思うが、400mを得意とする奥田 真澄（東京3）・小林 茉由（八王子3）が割って入る可能性がありゴールラインまで勝負はわからない。複数選手の24秒台が期待できる。

400mは、昨年55秒台をマークし南関東を制している小林が優勝候補ではあるが、今季はまだ56秒台にとどまっている。逆にシーズン早々に56秒66を強風の中で記録した奥田 真澄も好調を維持しており二人で争いそうだが、白梅学園3年の村上 ちはるが復調してきたのが侮れない。三つ巴の混戦となる事も考えられる。

中長距離

800mは昨年5人もの選手が東京都から大分インターハイに出場し、そのうち2人が決勝に進出した。その時、8位に入賞した奥田 静香（東京3）が優勝候補の一番手だろう。今季はまだ本来のレースをしていないが400mのスピードが向上しており、今大会ではその力を発揮するだろう。奥田を追うのは、やはり昨年インターハイに出場している松尾 咲子（城西大城西3）だ。また、今季急成長な加藤 海木子（錦城3）をはじめ、木村 綾愛（早稲田実業2）、古本 菜々子（久我山3）と五十嵐 恋（2）・吉沢 伶（3）の日本橋女学館コンビも力がありレース展開次第で奥田・松尾を上回る可能性もある。タイムレースの予選も油断できないだけに記録への期待もできる。是非とも2分10秒を切るような積極的なレースをしてもらいたい。

1500m・3000mでは順天の佐藤 みな実（2）・平賀 奏美（1）と八王子の元廣 由美（3）・今泉 野乃香（2）の駅伝ライバル校のマッチレースの様相だ。実力的には佐藤が一枚上手だが、新人の平賀が先頭を引っ張るようだと混戦になるかもしれない。これに宮田 彩子・金杉 侑香の東京高校2年生コンビをはじめ秋の関東駅伝出場を狙う錦城学園・都若葉総合の選手たちが続くだろう。

・ハードル

100mHでは、昨年1年生ながら13秒台をマークしている澤田 イレーネ（都文京2）の優勝は間違いないだろう。しかし、春先の故障からか今季は未だハードルに出場していないだけに心配だ。澤田が本調子でなければ鳴川 亜美（白梅学園2）・長坂 くるみ（吉祥寺女3）あたりが優勝に絡みそう。さらに新人の八尋 はるか（白梅学園）が加わり昨年の新人大会同様14秒台前半のハイレベルな争いになるだろう。

400mHでは、東京選手権で1分01秒台をマークした柳下 美佐子（戸板女3）が安定したレースを今季連発している。今大会では一気に1分を切りたいところだ。野田 夏美（白梅学園3）・大野 穂花（東

京3)・吉沢 伶(日本橋女学館3)・田島 梨紗乃(東京2)らも1分2秒台を目指し予選から積極的なレースをするだろう。10台目を越えてからのデットヒートが楽しみである。

・競歩

今大会13名の出場と昨年より出場者が減少したが、競技力は確実に向上している。昨年、東京都から久しぶりにインターハイに出場した加藤 泉美(都高島3)が昨年の自己記録を30秒近く短縮しており、確実に「進化」しているようだ。歩型・スタミナ・スピードともに優位である事から今年も全国出場に向けて更なる記録向上を楽しみにしたい。26分台が関東出場の4位争いとなる可能性もあるだろう。

・跳躍

走高跳では、昨年の記録を見ると小林 玲奈(都足立新田2)が1m67でトップだが、今季はまだその記録をマークできていない。七種競技が専門で、1m65以上の記録を持つ白梅学園の澤田 珠里(3)も今大会この種目には出場しない。混沌とした上位争いを演じそうな選手は、高橋 このか(白梅学園2)、佐藤 佑香(東京3)、五十嵐 静香(日出3)、伊徳 有加(都芦花2)に小林を含めた5名かと思われるが、どれだけ1m70に近づくかが見どころだ。6位入賞は1m61あたりか？

走幅跳では、昨年6m08を跳び東京都高校記録(6m09)まで「あと一步」とした水口 怜(白梅学園3)の優勝はほぼ間違いないだろう。自校の先輩、佐々木 あゆみ選手の持つ記録をいち早く更新することは大なる目標であるに違いない。今大会最も注目される種目だろう。水口と争うのもやはり白梅学園の高橋 このか・小林 結(2)で、新人の高畠 実咲(日工大駒場1)とともに5m70以上で上位を伺うチャンスもある。

オープン種目の三段跳は、今年の全国選抜選手権の標準記録が11m30に上がっただけに、その記録を目標としたい。この種目を得意とする江戸川女子の小林 優里(3)・吉若 藍(3年)と川村 香月(東京3)にそのチャンスがあると思う。優勝記録が12mに近付くことを期待する。

・投擲

砲丸投では、坂本 早映(戸板女2)が支部予選で自身初となる13m台をマークし、いよいよ本領を発揮してきた。小柄ながら瞬発力に優れた潜在能力と卓越した技術を備えているだけに更なる記録の向上が確実視され全国入賞もかなりの可能性があると思う。坂本と同じ戸板女子2年の藤田 幸颯、清水 捺帆(都田無2)らが11m以上投げており、11m近くを記録しないと関東出場は難しいかも。

円盤投は、多種目と比べて36名の出場と少ない。その中で優勝を争うのは藤田 幸颯と石井 藍美(東京3)の二人に間違いないだろう。二人とも35m以上の記録を持つが安定せず支部予選の記録も33m台に止まっている。昨年の関東新人で36m17を投げている石井がややリードしている感もあるが40mを期待するにはやや荷が重い。先に35mを越えてきた方が心理的に有利になり勝機があるだろう。

やり投は、昨年42m以上を投げた澤田 珠里(白梅学園3)と後藤 紗希(東京3)が優勝を争いそうだが、二人とも今季はまだ40mすら越えていない。他にも40m以上の選手がおらず「さびしい」状況ではあるが、小林 比奈乃(都芦花2)、菅沼 奈未(明中八王子3)も力があり優勝のチャンスがあるだろう。

・混成競技

七種競技は、2年連続でインターハイに入賞している澤田 珠里と昨年1年生ながらインターハイに入賞した高橋 このかの白梅学園同士の戦いとなるだろう。しかも、二人とも万全であれば5000点近いかなりのハイレベルとなり「見ごたえ」がある。速水 舞(都駒場3)も昨年インターハイに出場しているだけに力があり4800点を目標にしてもらいたい。レベルが高い反面、出場者が11名とやや寂しいのが残念であるが、是非とも多くの選手に、陸上競技の能力を競うこの種目に挑戦してもらいたい。

・リレー

4×100mリレーでは、昨年45秒台の東京都高校記録をマークした東京高校が今年も全国優勝を目指している。エースのエドバーを中心にバトンパスにも磨きがかかり安定している。コンディションが良ければ今大会でも46秒台は期待できる。東京を追うのは八王子・駒大高・都つばさ総合でいずれも47秒台を目標にしてくるだろう。

4×400mリレーでは白梅学園が優勢だ。特出したエースはいないが57～58秒台の選手が複数おり層も厚く3分50秒を切るのは間違いない。白梅を追う八王子・東京も3分50秒を切ってくるだろうから今年のマイルリレーは全国一のハイレベルで、かつ接戦が予想される。3校とも「総力戦」となるだろうが、お互いの意地がぶつかり合う白熱した展開となるだろう。3校に続くのは駒大高・日本橋女学館あたりが関東出場を競い合うのではないだろうか？

・総合

東京高校が全般にわたり戦力が整っていることから総合優勝の第一候補だろう。白梅学園も走幅跳・七種競技・100mHなどでの大量点でどこまで対抗できるかが見物である。特に最終日に得意種目が多い白梅学園の追い上げに注目したい。八王子・戸板女子・日本橋女学館が2校に続くものと思われる。